

\*得恭の古芸堂筆記に、李氏朝鮮正宗九年、金傳の遺裔か、長淵府京畿道の山谷に於て、金股説敬順王金傳の第四子の墓誌を發掘し摺本を取り、再度墓誌を埋藏するの記事あり。これによれば、

金傳の第七子は鏞にあらざして鏞なり。或は、傳寫の誤にあらざるかと思はるれど、未だ何れか正しきかを知らず、姑らく鏞陽李氏の系譜に従ふこととせり。

## 天皇考

津田左右吉

我が國の「天皇」といふ御稱號は、いふまでも無く、漢語であつて、それに當る國語すらも無い。「スメラミコト」といふのが國語での御稱號であるが、これは「天皇」といふ語とは意味の上に何等の關係の無いものである。だからこれは前からあつた國語を漢譯したのでは無く、支那の成語を其のまゝに用ゐたのか又は我が國で新しい熟語を新作したのか、何れかで無くしてはならぬ。前の方ならば支那にかういふ成語があつたかどうか、あつたとすればそれは如何なる

意味を有つてゐたか、さうして我が國でそれを取つたのは如何なる理由からであつたかを考へてみる必要があり、後の方ならば、何故にかういふ文字を以てかういふ新熟語を造つたか、といふ點に説明を要する。ところが、其の説明がまだ世間に現はれてゐないやうに見うけるから、愚考の概要をこゝに述べてみたいと思ふ。我が國の上代に於いて支那思想がどれほどまで政府者の頭に入つてゐたか、また其の支那思想が如何なる方面のものであつたか、といふことを考へる一材料ともならうと考へる。

先づ順序として「天皇」といふ御稱號の用ゐられたのは何時からであるかを考へてみよう。それは勿論

漢字輸入の後に違ないが、其の起源が明白で無いからである。さて書紀を見ると、最初の神日本磐余彥天皇(神武天皇)から既に此の文字が用ゐてある。古事記には、御稱號としては、大帶日子淤斯呂和氣天皇(景行天皇)、若帶日子天皇(成務天皇)、帶中日子天皇(仲哀天皇)と、ずつと末の天國押波流岐廣庭天皇(欽明天皇)、長谷部若雀天皇(崇峻天皇)との他は、みな「命」としてあるが、本文は天皇を指す場合にはやはり一般に此の語が用ゐてあり、神代の卷(邇々藝能命の條)にも既に「天皇命」の文字が見える(景行天皇等の五代にのみ「天皇」とあるのは、傳寫の際に生じた誤では無からうかと思ふ)。しかしこれらは、記紀の編者もしくは其の材料となつた所謂帝紀と舊辭との記者の追書と見なされ得るものであり、よし帝紀と舊辭とにさう書いてあつたとしても、それが最初の編述の時からさうであつたかどうかは明で無く、後になつて幾度も行はれた改削の際に書きかへ

られたとも考へられ得る。それから書紀に引用してある百濟記(神功皇后紀六二年の條所引)、百濟新撰(雄略天皇紀二年の條所引)、百濟本紀(繼體天皇紀二五年の條所引)にも「天皇」の語が見えるが、これも書紀の編者の潤色を経たものと推測せられ得る。「天皇」といふ文字のみならず、一體に書紀に引いてある百濟記などの文には可なりにはひどく改削の加へてあるものが多い。このことは別に述べようと思ふから、茲には省略する。)だから記紀の古いところには此の文字が出てゐても、それは古くから此の御稱號が用ゐられてゐたといふ證據にはなかりかねる。たとへ推古天皇時代にかういふ御稱號の用ゐられたことは確實であらう。それは此の天皇の一五年(歲次丁卯)に書かれた法隆寺金堂の薬師像の光背の銘に「池邊大宮治天下天皇」とあるからである。この例から考へると、かの推古天皇紀二六年の條に見える「東天皇敬白西皇帝」の語も文字通りに承認して、差支が

ないやうであり、同じ天皇の時代に撰録せられたといふ「天皇記」の名稱もまた肯はれる。(隋との通聘については隋書の記事と對照して別に研究すべき點が多いが、「日出處天子致書日沒處天子」は推古天皇一五年即ち大業三年の文書、「東天皇」云々は其の翌年のとして考へ得られよう。)けれどもそれより前については確實な證據が何も無い。のみならず、古事記に御歴代の御稱號が(前に述べた五代を除けると)すべて「某命」とあつて「某天皇」としてないのは、其の原本となつた帝紀の書き方を其のまゝに踏襲したものでらしく、さうしてそれは推古天皇までも含んでゐるのであるから、此の天皇の時代にも「天皇」の語は公式の、又た一般に承認せられた、御稱號としては用ゐられてゐなかつたことが、それから推定せられはすまいか。帝紀の原本に「天皇」とあつたならば、安萬侶が(彼の時代には一般に「天皇」の御稱號を用ゐてゐたに違ないから)それを故らに「命」と書き改

める筈はなく、また其の帝紀が書かれた時に「天皇」が公式の御稱號であつたならば、それ故らに「命」と書く理由も無からう。だから、推古天皇の時代には此の御稱號がまだ公式のものとして決まつてはゐなかつたので、それはかの藥師佛光背の銘に聖德太子を聖王と書いてあるとほゞ同様な、或はまた同じ時代に「法興」といふ年號らしいものが用ゐられたのと大差の無い、いはゞ一部人士の私案に止まつてゐたのではあるまいか。ところが、それが外交文書にも、また同じ系統の人々の手によつて編述せられた皇室の御系譜(天皇記)にも、採用せられ、次第に廣く行はれるやうになつて、何時しか公式の御稱號となつたのではあるまいか。此の御稱號は支那文化の輸入に熱心であつた、同時にまた獨立國として支那に對抗しようといふ考の生じて來た、此の時代の思潮の所産として最もふさはしく考へられる。かう考へると、此の御稱號は大體推古天皇のころに始まつ

たと見なして差支が無いやうである。欽明天皇紀二年の條の註に見えるやうに皇室の御系譜を帝王本紀といひ、また古事記の序文や天武天皇紀一〇年の條にあるやうに後までもそれを帝紀と稱し或は帝皇日繼ともいつてゐるところから見ると、此の帝紀などいふ名稱の作られた時には「天皇」の御稱號がまだ出來てゐなかつたことと考へられ、さうして其の慣例は此の御稱號の定まつた後にも繼承せられてゐたらしい。欽明天皇紀一三年の條に出てゐる佛像獻上の時の百濟王の上表にも「帝國」とある。もつともこれは果して原文のまゝ載せてあるかどうか、明で無いが、漢字の盛に行はれるやうになつてからも、可なり長い間は特殊の御稱號が作られず、帝、皇帝、又は帝王、帝王、といふやうな一般的稱呼が適用せられてゐたのではあるまいか。(宋書などに倭王としてあるのは、其のころに於いて、特に支那に對する文書に於いて、當時の筆者が實際さういふ稱呼を用

ゐたからであらうが、文字の知識が加はつて來ると君主を王と稱してゐる百濟に對して其の上に立つことを主張する我が國の地位としても、やはり帝といふやうな文字を用ゐなければならなくなつたかと思ふ。)

さて此の御稱號が推古天皇ごろから始まつたとすれば、それはよほど支那の文獻の知識も發達してゐた時代のことであるから、もしこれが支那に於いて既に存在してゐた成語であるとすれば、其の意味も一通りは領解せられてゐたであらうと考へられる。が、支那の古典に於いて政治上の君主、即ち帝王の地位を示すためにかういふ名稱を用ゐた形跡は無いやうである。天皇氏といふのはあるが、これは地皇氏、人皇氏と並んで上代の帝王に擬せられた(空想上の)或る個人の名であつて、帝王の地位の稱呼では無い。史記の始皇本紀に見える天皇地皇秦皇の天皇も同様である。たゞ唐の高宗が天皇と稱したこと

はあるが、これは推古天皇の時代よりもずつと後の話である。然らばかういふ稱呼が全く無いかといふと、それはある。

先づ緯書の春秋合誠圖に「天皇大帝北辰星也」とあるのを擧げねばならぬ。北辰星は即ち北極星の *Ursa Minoris* 即ち *Polaris* のことであるが、なぜ北極星を天皇大帝といふかといふに、これには少しく説明を要する。史記の天官書には「中宮天極星、其一明者太一常居也」とあつて、北極星は太一といふ神の居所となつてゐる（天極星は五體を五宮に分けた中の一つ、即ち北極を中心とする中宮の名であるが、「其一明者」は即ち北極星と見なければなるまい）。太一は同じ史記の封禪書に「天神貴者太一、太一佐曰五帝」とあり、天に於ける五帝（青帝、赤帝、白帝、黒帝、黄帝）の上に立つてゐる最高の天神、即ち天帝であつて、漢の武帝の時にそれを祀つたところがある。ところが封禪書にはそれとは別に、やは

り武帝の條に、天一、地一、太一、といふ三神のあることが書いてある。前の太一は天を主宰するものであるが、後のは天一地一の上に立つて天地を統一するものであり、一層高い、一層抽象的な意味を有つてゐるのであらう。さうして天一が前の意味での太一に當るのであらう。太一といふ名は天または道の名として莊子や呂子春秋に出てゐるが、後にはそれが神となつて、天といふ觀念から出立する場合には天に於ける五帝の思想と聯結せられ、道といふ觀念から發達する場合には天地といふ思想に結びつけられ、何れの場合でも、其の名が太一であるために、五帝もしくは天地を統一主宰する神になつたのである。（始皇本紀の天皇、地皇、泰皇は此の後の方の思想と同一系統に屬するものであつて、泰皇は太皇とも書かるべきものであり、たゞそれが神にならずして古帝王になつたのである。さうしてこの場合でも「泰皇最貴」とあつて、泰皇は天皇地皇の上に立つ

てゐる。) 天も道も畢竟一に歸するのであり天一も太一もつまり同じ事になるのであるが、天といふ觀念には宇宙を支配する意味と地に對立する意味とがあるから、思想の發達する徑路を辿つて見ると、かういふ事がいはれようと思ふ。さて北極星は(精密にいふと少し違ふが大體に於ては) 衆星運行の中心となりつゝ永遠に動かさぬといふので、天の中心とせられてゐるのであるから、従てまた天の統治者となり、第一の意味での太一に結合せられるのは自然であつて、天官書の索隱に引いてある緯書の春秋文耀鉤には「中宮大帝其精北極星」と見えてゐる。こゝでは北極星が太一の居所から其の精に進んでゐると共に、太一が大帝と呼ばれてゐるのである。<sup>33</sup> 五帝の上に立つ神であるから大帝といはれるのも當然であらう。然るに天を主宰する神即ち天帝には別に天一といふ名があるが、天一、地一、太一が天皇、地皇、太皇の名に於いて古帝王としても考へられて

ゐたとすれば、神としてもまた、天一が天皇といはれるやうになつたと考へるに差支は無からう。天皇といふ名は漢代の作らしい春秋保乾圖にも出てゐて「斟元陳禩、以五易威」とあるが、これも天帝のこと、解せなければなるまい。そこで同じく天を支配する意味での太一(大帝)の精たる北極星は、同じ意味の天一(天皇)と結合せられ、天皇大帝と稱せられることになるのである。(更に一步を進めていふと北極星を天一と呼んだことがあるかとも思はれるが、これは明では無い<sup>33</sup>)。「天皇大帝北辰星也」とある春秋合誠圖の説には多分かういふ由來があるのであらう。さうして、こゝでは天帝の稱呼であつた天皇大帝が星の名になつてゐるのである。星の方からいふと太一の精であつたものが太一そのものになつたので、太一の常居とせられてゐた時から見ると三段目の變化である。北極星は帝王の象徴とせられてゐるし、また天官書に見える如く、列星を政治組織と

して見る支那人 星占學的思想では、星の世界に於ける帝王の地位にあるものでもあるから、こんな迂曲な考へ方をしないでも、北極星を天皇といふのは此の星が天の統治者であるからだ、直截な推斷を下してもよささうであるが、天皇といふ熟語が政治的君主を指す一般的稱呼として用ゐられた例が無いやうであるから、それは少しく無理であらう。天皇は即ち天帝であつて、本來宗教的意味のものであり神である。ただそれが象徴的もしくは比喩の意味に於いて政治的君主の觀念と思想上の聯絡を有つてゐるに過ぎな(4)。

以上は緯書の説を史記の天官書によつて考へたのであるが、後世の文献ではそれがまた變つてゐる。晋書の天文志を見ると、紫宮中に北極五星と鉤陳六星とがあるが、「第一星主月、太子也、第二星主日、帝王也、亦太乙之坐、謂最赤明也、第三星主五星、庶子也」と説いてある三星は北極五星中のものらし

い。此の第二星の説明が史記天官書の「其一明者太一常居也」から來てゐることは明であつて、太乙は太一の文字が變つたものと思はれる。既に淮南子天文訓にも「紫宮者太乙之居也」とあつて、此の太乙は天官書の太一であらうから、前漢時代にも早く此の文字が用ゐられ、それが後に傳はつたのであらう。だから、この星は北極星を指してゐるらしく、北極五星として數へられてゐる中にあることからさう察せられるが、しかし三つの星を數へて其の第二位に置いてゐるのは、北極星を指すものとしては甚だ不似合である。ところが茲に又た「鉤陳口中一星天皇大帝」といふことが別にある。此の天皇大帝が所謂北極五星の外にあることは明であるが、それがどの星であるかは問題である。「口中」とは圍まれてゐるといふ意味らしいが、鉤陳は「鉤陳後宮也、大帝之正妃也」とあつて、それを天官書の「後句四星、末大星正妃、餘三星後宮之屬也」に對照すると、後

句のことであるらしく、句も鉤も屈曲してゐる形から名づけたのであらう（星の数の多くなつてゐるのは觀測の精密になつたためと考へられる）。だから其の鉤陳に圍まれてゐて「其神曰耀魄實主、御群靈、執萬神」といはれてゐる天皇大帝は、どうも北極星らしい。かう考へて、天皇大帝は緯書の説に於いて北極星とせられてゐたこと、又た天官書に於いて三公に擬てゝあつた三星に當るものが、こゝでは所謂北極五星の中にあるとするより外に配當のしやうのないことを思ひ合せると、此の臆測は間違はないやうである。同じ天文志に紫微を「大帝之坐也」といつてあるのも其の一證となるであらう。なほ著作の時代は不明であるが緯書の春秋佐助期に「紫宮天皇耀魄實之所理也」とある紫宮天皇も（緯書の思想の系統から推測すると）北極星らしいが、耀魄實といふ語が、此の天文志にもあることを參照するがよい。さすれば天官書に於いて北極星であつた太一の常居

たる明い星は、所謂、旁三星中の第二に位するもの（*B. Urse Minoris*であらう）に移され、三公であつたものが、帝王と太子と庶子とに改められたのでは無からうか。さうして、それを帝王とする點に於いて北極星の屬性のこゝに移されたことが知られるのでは無からうか。（北極五星といひながら三星しか説明の無いのは、それが最も目につく星だからと思はれるが、もしさうとすれば天官書に三星としてあるのはよくそれに合ふ。ただそれを五星にしたのはやはり觀測の進歩であらう。春秋合誠圖にも既に「北辰其星五」とある。）同じ晋書では太一といふ星が別にある（太一は勿論別にあつて太一と並んでゐることになつてゐるが、さういふ例のあることから考へても、此の推測が肯はれるやうである。北極星を除けた外のものに北極五星の名をつけるのも變であるが、北極星だけは特に尊敬して他のものから區別したのであらう。）



要するに晋書天文志に於ては、天官書の太一が分れて太乙と太一との二つになり、もとの太一(天帝)は太乙と書かれ、新しい太一は北極星とは違ふ小さい星の名となり、さうして天皇帝は依然北極星の名として保存せられてゐるのである。ただ天皇が天帝のことであつた本来の意味を失つて單に星の名とせられてゐるのは、上に述べた緯書の説を繼承したものであり、太一が星になつたも同様である。太一が太一と並んで小さい星の名とせられたのも或は之と同じ時代のことでは無からうか(上文参照)。星占學的天文學に於いては、其の思想の發達と共に、神または抽象的觀念を一々具體的に星の名としようとする傾向がちのづから生ずるのであらう。

しかし天皇はまた北極星で無く別の天體とも結合せられたらしい。楚辭の遠遊に「召豊隆使先導兮、問太微之所居、集重陽入帝宮兮、造旬始而觀清都」といふ句があるが、王逸は其の各句に註して「呼召

雲師使清路也。博訪天庭在何處也。得升五帝之寺舍也。遂至天皇之所居、旬始天皇名也。」といつてゐる。此の大微は多分天官書の南宮に屬する太微宮であつて、「三光之廷」といはれ「其内五星五帝座」と記されてゐるものであらう。さうしてそこが即ち帝宮であり、清都であつて、「天皇之所居」だとすれば、此の天皇は大微宮に居るものである。本来比喩的の叙述であるから本文が頗る曖昧であり、また遠遊の作られた時に天皇といふ名稱が既に存在してゐたかどうか問題であらうが、少くも王逸がかう註釋してゐるのを見ると、後漢時代にはかういふ見解もあつたとしなければなるまい。さて天皇の居所を太微宮とするのは、それが黃道に當つてゐるからであらう。北極星は恒星の系統の上から見て天體の中心と見なされるが、日月の運行からいふと太微の邊が大切である。そこに五星五帝の座があるといふのも、やはり五帝の思想の淵源となつてゐる五遊星の軌道と結

合して考へたものではあるまいか。(天官書にいふ五星五帝の座といふのは五帝の表徴として五つの恒星がそこにあるといふのではないやうに思はれる。さう考へることは五帝の觀念に矛盾するからである。

しかし晋書の天文志には「四帝星夾黃帝座」とあるから、そこに黃帝の座とせられた星を中心として五帝を表する五つの星から成立つ星圖があるやうに見える。太微宮中の一星に黃帝の座があるといふ正義の解釋も多分これと同じ考であらう。が、これは五帝の本來の意味が不たしかになつた後世の思想によつて作られたので、恰も太一といふ星が出来たのと同じではあるまいか。晋書には北極の方面にも五帝の名を有する五星のあることが説いてあるが、これも天官書などには見えないことで、後世の考であらうと思ふ。よし五つの星が丁度都合よくかたまつてゐたにせよ、それを故らに五帝としたのは、別に思想上の由來がなければなるまい。(8) 太微宮はかうい

ふ顯著なものであるから、天皇がこゝにゐるといふのも一つの見かたである。さうして此の天皇が天の主宰者、即ち天帝であることは、あのづから推知せられよう。淮南子天文訓に「太微者太乙之庭也、紫宮者太乙之居也」とあり、史記索隱に引いてある宋均の説に「太微天帝南宮也」とあるやうに、紫宮、即ち北極を天帝の常居とする説でも太微宮を疎外することが出来ず、二つをつなぎ合せてゐることを參照するがよい。

以上は星占學的思想に於いて取扱はれた天皇であるが、神仙説及びそれを中心として發達した道教の方では、また別の意味で天皇の名が現はれてゐる。葛洪の著といはれてゐる枕中書を見ると、玄都太真人が葛洪に與へたといふ眞書眞記といふものが載せてあるが、其の眞書には、太初に元始天王、即ち盤古真人が現はれ、次に太元聖母が現はれ、其の太元聖母が天皇(即ち扶桑大帝東王公)と九光玄女(即

ち太真西王母)とを生み、それから地皇、人皇が順次に生れたとある。これは三五曆記などに見えるやうな盤古の開闢説話、天皇氏地皇氏人皇氏といふ古帝王としての三皇の觀念を神仙思想に結合したのであつて、天皇は天皇氏として知られた古帝王の性質を保持しながら東王公といふ神仙となり、仙界に於いて現に存在するものになつてゐる。地皇人皇と列んで記されてはゐるけれども、それは從來の三皇説話を其のまゝに取つて結びつけたからであつて、道教に於てはそれよりも扶桑大帝東王公とし太真西王母と對立させたところに意義がある(天皇のみに東王公の名が結合せられ、地皇人皇には仙界に於いて地位を有する何等の名稱をも附與せられてゐないことを見ても、それは知られる)。此の東王公(或は東王父)が西方の崑崙にゐるといふ西王母に對して作られたものであつて、太帝と稱せられ、東方の扶桑にゐるとせられてゐることは、神異經、海内十洲記

または漢武帝内傳のやうなものにも記されてゐる。崑崙や所々の仙宮に關する説明は時代により書物によつて小異動があるが、東王公西王母についての大體は變らない。だからそれと結びつけられた天皇は説話の上では古帝王としての性質が保持せられてゐるが、實際の信仰としては純然たる天上の神仙なのである。仙界の中心は或は玄都(元都)玉京とせられ、或は崑崙にあるとせられ、山の上にあるやうになつてゐるが、これは神仙説の生じた最初からの因襲でもあり、支那思想の一特色でもあるので、それが天上の性質を有つてゐることはいふまでも無い。現に枕中書には「元始天王在天中心之上、名曰玉京山」とあるが、此の「天中心之上」は、緯書の龍魚河圖に「崑崙天中柱也」とあり、神異經の中荒經に「崑崙之山、有銅柱焉、其高入天、所謂天柱也」とあるのを參照してみると、山上ながら其のまゝ天上であることが明である。東王公の太帝宮も扶桑の上

にあり仙人が空を飛んでそこに伺候するのである。扶桑公の太帝とせられたのもそれに關係があるので太帝は天帝の意味に用ゐられた漢代の稱呼から轉じて來たのであらうが、天帝の天にゐるのは當然である。天皇の名が扶桑公に結合せられる理由もこゝにあるので、此の意味からいふと、道教思想の天皇にもやはり天帝の觀念が含まれてゐるといはねばならぬ。海内十洲記に、北海の外にある鐘山及び其れに連る山の上に天帝の居があつて仙人の出入する道があると説いてある。神仙と天帝とはいろ／＼な方法によつて結合せられてゐる。

此の意味は天皇の父とせられてゐる元始天王との關係を見ても推測せられるが、それについては天王といふ文字を一應考へて置く必要がある。元始天王は枕中書に「昔二儀未分、溟滓鴻濛、未有成形、天地日月、未具狀、如鷄子、混沌玄黃、已有盤古真人、天地之精、自號元始天王、游乎其中、」とあつて、

陰陽未分、天地剖判以前に現はれたのであるが、隋書經籍志に「道經者云、有元始天尊、生於太元之先、稟自然之氣、冲虛凝遠、莫知其極、」とあつて、兩方の記事が同じ意味を示してゐ、玉京の上にあることも兩方に見えてゐるから、元始天王が元始天尊とも呼ばれてゐたことは疑が無く、普通に天尊といふのが其の略稱であることも推測せられる。すなはち天王は天尊と同意味で、王は尊稱として用ゐられたものとして解釋ができる。しかし時代を溯つて考へると、天王といふ語は既に漢代にも用ゐられてゐたので、金索に見える漢鏡に「天王日月」の文字のあるものがあり（漢天王日月鏡、漢許氏鏡）、史記の天官書にも東宮の條に「東宮蒼龍房心、心爲明堂、大星天王、」また「大角天王帝廷」と見え、史記索隱に引いてある緯書の春秋說題辭には「房心爲明堂、天王布政之宮」とある。漢鏡の天王は意味が不明であつて、日月と併稱したのか日月を指す尊稱なのか

すら確に知り難いが、日月を指して天王といふのも他に例が無いやうであるから、多分前の方であらう。ところが天王日月とあつて日月天王としてないところを見ると、例へば星辰などの如く日月の下についてそれと並び稱せられるものをいふのではないやうである。もつとも星辰でも北極星は特別に尊重せられてゐるから、天王は即ち緯書などの天皇で北極星のことかとも臆測せられるが、北極星を天王と書いた例はまだ見ないから、これは無理であらう（天官書には心宿の大星の Scorpion 即ち Antares を天王といつてあるが、漢鏡の天王が此の星でないことは前にいつた如く天王日月とある順序から推測せられよう）。然らば日月の上に立つ天王は何かといふと、史記封禪書に「天子始郊拜太一、朝朝日、夕夕月」といふこと、また「爲伐南越、告禱太一、以牡荆畫幡日月北斗登龍、以象太一三星、爲太一鋒、命曰靈旗」といふことがあるから、それによつて太一と日

月とが關聯して考へられてゐたことが推測せられ、天王は即ち太一の稱を有つてゐる天帝のことでは無いかといふ臆測ができればまいか。此の太一は天官書の太一と同じものであらうから、北極星を居所にしてゐる天帝ではあるが、まだ緯書の説の如く北極星そのものとはなつてゐないのである。天帝日月と並稱したものと見れば、此の順序にも別に無理は無い。次に天官書の天王であるが、先づ大角(α Bo. 即ち Arcturus)を天王の帝廷といつてあることに注意せられる。其の理由は明かに解しかねるが、光輝の最も強いものであると斗杓の指すところに當るので、特にそれを尊重したのであるまいか。しかしこれは大角其のものを天王といつたのでは無いから、天王は別になければならぬが、それは恐らくは天帝のことであらう（兩攝提を左右に従へてゐるといふ形を人君の象とするやうな説明は、大角其のものを天王と見たのであるから、後になつて生じた

考と思はれる。以上の二例は天王が天帝の意に用ゐられた場合であるが、前にも述べた Antares を天王といふのはそれとは違ふ。これは星そのものを天王と名づけたのである。何故に此の星が天王といはれたかは、やはり明にはわからないが、東方の星宿とせられてゐる心宿にあつて最も強い光を出すためと見る外は無からう。さうしてそれは人君の象徴として比喩的に稱へられたので、心宿を明堂といふのもそれがためである（漢書天文志に「房心間天子宮也」とあるのが参考せられる。又た春秋説題辭にある天王布政之宮は晋書天文志には天子布政之宮としてある）。なほ何人も知つてゐる如く春秋には時の君主たる周の天子を天王といつてあるが、これは天命を受けた王といふ意味かと思ふ。何故に春秋に限つてさういふ稱呼が用ゐてあるかは解釋に苦しむところであるが、それが一般の慣例で無いことは明である<sup>10)</sup>。天王といふ語はかういふ風に種々の意味で用

ゐられてゐるが、それを天帝といふ意味に用ゐてゐるものがあるとすれば、元始天王にもやはり其の觀念の含まれてゐることが、其の名稱と説話とから、推測し得られよう。特にそれは天地未分の前、宇宙の太初から、存在してゐるのであるから、天王の名の示す如く天にゐて天の性質を有つてはゐるが、單に天のみでは無く、一切の宇宙を統治する意味に於いての天帝なのであらう。さてかう考へて來ると、枕中書に於いて三皇の天皇がそれと結合せられたのもやはり天皇を天帝として認へたからであらう、と推測せられる。

神仙の話のある書物に見へることはあるが、天皇がまだ枕中書の如くに、神仙とはせられずして五帝の觀念と結合せられてゐる説話がある。それは上にも引いた神異經の中荒經に崑崙銅柱の東西南北と中央と東南と西北とに宮があつて、其の中央のを天皇の宮といふと記してあることである。此の天皇は

何を指すかといふに、東西南北の四宮の宮牆の色を青白赤黒としてあるところから見ると、この配當は五行思想に由來があるに違なく、さうして崑崙がまだ神仙に結合せられない前には、此の山が或は莊子列子などの説の如く黃帝の居としてあり、或は楚辭や山海經の記事の如く天帝の都となつてゐたことを考へ合はせると、此の天皇は黃帝から轉じて一步を進めた天帝をいふのでは無いかと臆測せられる。淮南子地形訓に崑崙にあるといふ懸圃の上に大帝の居があるといふ話があるが、此の大帝が天帝の意味であるらしいことも參照するがよい。ところがまた別に西北のを地皇の宮としてあるから、それとの關係も考へねばならぬ。さて此の神異經の大體の意圖は崑崙の所在を中心として、それと、東西南北と、東南、西南、西北、東北と、合せて九方を立て、ゐるのであるが、同じく崑崙の周圍にあるとせられた宮の數は上に述べた如く七つであつて、西南、東北の

二方に當るものが缺けてゐるのは怪しい。のみならず、其の宮が上記の二方の外は天地長男(東)、天地中男(北)、天地少男(東南)、天地中女(南)、天地少女(西)としてあつて、當にあるべき天地長女にあてべきものが無い。此の事實から推測すると、缺けてゐる西南、東北の何れかに此の長女が配當せらるべきであり、更に進んで考へると、天皇、地皇、とある以上、やはり無くてはならぬやうに思はれる人皇もあつて、それが残る一方に結合せらるべきであらう。さうすると九方が完備する。今の本にはそれが遺脱してゐると思はれる。もし此の推測が正しいとすれば、これは五行思想及びそれと關係のある五帝の思想と三皇の説話とを結合したものであつて、中央に黃帝もしくは天帝の文字を用ゐずして天皇としたのは此の故であらう。さうして其の三皇はこゝでも古帝王の性質を失つてゐるから、天皇はやはり天帝であらう。なほ漢鏡に「五帝天皇」といふ文字の

あるものがあるが（富岡氏古鏡の研究）、これは五帝を一つの概念としてそれを天皇と稱したのか五帝の一々を天皇としてそれを總稱したのか何れにもせよ五帝は天帝が五行思想によつて分化したものであるから、此の天皇もまた天帝の意であらう。

かういつて來ると、神仙説もしくは道教に於いて用ゐられた天皇もまた天帝の意味であること、少くともその意味の含まれてゐることが推測せられるがこれが前に述べた星占學的思想に於いて發達して來た北極星の天皇と結合して考へられたかどうかは問題である。が、道教に於いては古傳説も從來の民間信仰も知識階級の間に行はれた祭祀も悉く取り入れてゐるので、古帝王や聖賢は何れも仙官となつてゐるし、隋書經籍志道經の條には天皇太一五星列宿がみな祭祀の對象となつてゐるやうに書いてある。宣和書譜を見ると紫微北極大帝像を闔立本が畫いてゐるが、これはやはり道教で用ゐられたものらしい。

同じ書に五星二十八宿九曜壽星の像といふやうなものが六朝時代に多く作られたことが見えるが、中には道士の作さへもある。従つて實際の信仰としては星によつて象徴せられた又は星と結合して考へられてゐる天皇と此の神仙としての天皇とは、おのづから混合せられてゐたこと、思はれる。

以上述べて來たところは隋代以前の典籍に於いての考察であるが、それを概括していふと、天皇は一つの意味に於いては本來天帝のことであるが、それが後には北極星の名となり、他の意味に於いては太古の帝王とせられた空想的人物の名から一轉して神仙となり、それと共に宗教的信仰の對象となつて、やはり天帝の觀念に結合せられてゐるといふことである。何れにしても宗教的性質のものであるが、しかしそれに比喩的又は附隨の意味に於いて君主といふ觀念が伴つてゐることは勿論である。さうしてこれは我が推古朝時代の政府者にも一と通り知られて



むたことであらう。支那の南北朝時代に於ける我が國と南朝との交通状態を知つてゐるものは、此の間に多くの支那の典籍が將來せられ讀誦せられたのみならず、其の他の種々の方法によつても、可なり多く支那の思想を受け入れてゐることを拒まぬであらう。隋代に當る推古朝前後に於いては猶更である。特に神仙の思想は南北朝時代に於いて大に發達し、所謂道教の形成も此の時代であるから、よし道教としては入つて來なかつたにしても、其の思想は傳へられたに違ない。田道間守や浦島が仙郷にいつたといふ物語は多分此の間に作られたのであらうと思はれる。大祓の祝詞に伴つてゐる東西文部の咒に東王父西王母の名の出てゐることはいふまでも無い。古事記に於いて神代史の最初に現はれてゐる天御中主神の如きも前に述べた元始天王とゆかりがありげである。太古に現はれた元始天王は天の中心の上にあるといふでは無いか。神代の長さを百七十九萬幾千

年といふやうな數字で現はすことも、枕中書に天王地皇、人皇の治世が各々三萬六千載であるといひ、隋書經籍志に道家が四十一億萬載の數を擧げてゐることを記してゐる類を參照する必要があるであらう。古事記の神代の卷の末に出てゐる五百八十歳といふやうなことも、長壽の思想と關係がありはしまいか。又た魏書の釋老志にあるやうに無極至尊、大至真尊、天覆地載陰陽真尊、洪正真尊といふやうな太古の神仙の名の列擧せられてゐることも、神代史について參考すべきことであり、それに聯關して(何時の人の考から出たことか知らぬが)神代紀の卷頭に註記してある「至貴曰尊」といふ文字の用法も注意しなくてはなるまい。それから天上に仙界のあることも、神仙が虚空から下つて來ることも、又た高い山が神仙に關係のあることも、支那に於いて常の話である。これらのうちには必しも支那の神仙説もしくは道教特有の思想とはいはれないものもあるが、神代の物

語の作られつゝあつた頃の日本人の頭に神仙説の知識のあつたことが確かである以上、看過してはならぬことである。神仙思想では無いが、桃で妖邪を攘ふといふ支那人の習慣も神代史の中に取られてゐるし、元中記にある如き左右の目が日月になるといふ説話も、少しく形をかへて、やはり神代の物語に入つてゐる。書紀に屢々見える傳國の璽といふ思想もたゞ文字を學んだばかりでは無いかも知れぬ。風土記に見える、天女の物語も支那の説話にゆかりがある。これらの支那思想を受け入れたのは、必しも推古朝の時もしくは其の前のことには限らぬが、かういふ傾向は其の前後を通じて長い間、大した變化なしに存在したのであらう。

上述の事實を背景にして考へる時、「天皇」といふ御稱號がやはり支那の成語を採つたものであることは、ちのづから推知せられる。さうしてそれは恐らくは神仙説もしくは道教に關係ある書物（假に例を

擧げていへば枕中書のやうなもの）から來たのであらうと思はれる。枕中書に見える天皇が「扶桑大帝東王公」といふ名を有つてゐて東方の帝とせられてゐることも考の中に入れて置くべきである。史記などの所謂正史や漢以後南北朝時代に盛に作られたかゞの繪書も讀まれてゐたに違ないと思はれるが我が國では星のことが全く閑却せられてゐて、神代史にも星の重要視せられたことが見えないから、北極星によつて象徴せられてゐる、もしくは北極星の名となつてゐる、天皇の觀念は深く顧慮せられなかつたらう。さうして支那に於ける天皇の稱呼は帝王としての意味を裏面には含みながら、宗教的觀念が主になつてゐるのであるが、これは恰もよく、上代人の思想に於いて政治的君主であらせられると共に宗教的には神であらせられると考へられ、天つ神の御子孫として天から降られたといふことになつてゐた我が皇室の地位に適合するものであつて、此の語

の採られた主意もそこにあつたに違ひない。推古天皇紀八年の條に見える新羅の上表に「天上有神地有天皇、除此二神、何亦有畏乎」とあるのは、何時ころ書かれたものか判然しないが、天皇を神として書いてあるのは、やはり此の思想から來てゐる（この上表といふものは、勿論、眞の上表では無く、我が國の政府もしくは史家の手になつたものである）。もとより天といふ字を用ゐることが總て支那思想から來たといふのでは無く、天つ神といひ、天つ日嗣といひ、さういふ觀念は我が國で發生したものであらうし、神代史の材料となつた種々の folk-tale などに古くから我々の民族の間にいひ傳へられたものがあらうが、漢字にそれを寫すに當つては、それに最もふさはしい文字を適用することが必要であるので「天皇」といふことについてもかういふ成語が丁度都合よく支那にあつた、め、それを採つたのである。支那の典籍から種々の知識を得ても、天皇氏が十三

頭だといふやうな元中記や枕中書の奇怪な説話は少しも採つてなく、また前に述べたやうに星のことも全然學ばなかつたところに、日本人としての特色があるのであるが、支那から學んだところの多いこともまた決して忘れてはならぬ。

「天皇」の御稱號が我が國に採用せられたのはそれに宗教的意義があるからであつて、其の直接の由來が神仙説にあるといふことは、上述の考察によつて疑が無からう。ところが唐の高宗の時に此の稱呼が用ゐられたのも、やはり道教から來てゐる。舊唐書高宗本紀咸亨五年（上元元年）八月の條に「皇帝稱天皇、皇后稱天后」とあるのがそれであつて、皇后は即ち則天武后であるが、當時の宮廷の狀態から考へると、これは多分則天の意から出たことであらう。ところが同紀同年十二月の條には「天后上意見十二條、請王公百寮皆習老子」といふ記事がある。唐の帝室が老子であるために老子を特に尊敬したことは

周知の事實であるが、老子が道教の祖として一般に考へられてゐたことはいふまでも無い。上元といふ年號もまた道教思想から來てゐるので、漢武帝内傳には上元之官といふこともあり、上元夫人の名さへ見える。唐室が麟德三年に追號した老子の稱號も太上玄元皇帝といふのである。なほ則天が制を稱した嗣聖元年には東都（洛陽）の名を神都と改め、垂拱四年には偽造の瑞石文によつてみづから聖母神皇と稱した。神都神皇には勿論道教的意味があり、聖母はかの太元聖母に例がある。唐代の支那に於いても天皇の稱呼に宗教的意義があるとせられてゐたことはいふのであらう。（序にいふ高宗の諡は天皇大帝といふのであるが、これはたゞ天皇の下に大帝の二字を附加したのみで、北極星の天皇大帝とは關係が無からう。しかし大帝の二字についていふと、東王公の稱號と聯絡があるかも知れぬ。）

以上が「天皇」の御稱號の由來に關する卑見であ

る。余は道教に關する書物を多く讀んでゐないし、また天文上の知識も殆ど絶無であるから、上文の所説には遺漏が多からうと思ふが、大體の見解に於いては大過無きものではあるまいかと考へる。さうして上代に入つて來た支那思想には、勿論、儒教的のものもあるが、それよりも神仙説や讖緯説に關するものの方が多かつたであらうと思ふ。またそれがよく受け入れられたであらうと思ふ。神仙説の影響が記紀の物語や萬葉の歌に少からず現れてゐ、讖緯思想が書紀や續記の到るところに見られるのみならず、平安朝人の生活にもそれが大なる影響を及ぼしてゐることはいふまでも無いが、其の起源は南朝と交通した時代にあるのであらう。神仙や讖緯の思想は、儒教が特殊の社會に尊信せられたとは反對に、一般に廣く行はれたものであり、また行はれる性質のものである。種々の民間信仰や民間の習俗もそれに結合せられ得るし、また實際結合せられたので、所謂

這教はそれを集成したものである。上代の日本人にその思想が受け入れられたのも偶然ではあるまい。

### 註

(1) 此の始皇本紀の三星が天皇地皇人皇といふ三才の思想から来たもので無いこと、秦皇と太一とが同じ觀念に基づいてゐるものであることについては、白鳥先生の啓發をうけてゐる。なほ滿鮮地理歴史研究報告第六に出てゐる拙稿「上代支那人の宗教思想」第八章及び追記IVを参照せられたい。

(2) 楚辭の九歌の題目に東皇太一といふのがあるが、本文には此の名が見えない。なほ漢代の作らしいといふ惜誓に、朱鳥を先驅とし蒼龍白虎に太一の象輿をひかせて虚空を聘せてゆくといふ話があるが、その太一が北極星と關係があるかどうかは不明である。しかし何れに於いても太一が人格化せられ神とせられてゐることは推測せられる。

(3) 天官書には「中宮天極星、其一明者太一常居也、旁三星三公、或曰子屬、後句四星、末大星正妃、餘三星後宮之屬也、環之匡術十二星藩臣、皆曰紫宮、前列直斗口三星、階北端兌、若見若不、曰陰德、或曰天一」とあるが、この「或曰天一」の一句の所屬は頗る曖昧である。

文勢からいふと天一は陰德の別名らしく解せられるがしかしかういふ見えたり見えなかつたりするほどの星、しかも三つあるものに天一といふ立派な、しかも一つの名をつけて置いたとは、少しく受け取り難い心もちがする。だから「曰陰德」までは北極星と其の傍の三星、後句の四星、其のまはりの十二星とを總括したものの即ち所謂紫宮内のことを説き、それに陰德を附記したので、「或曰天一」は、もとへもどつて「其一明者太一常居也」にかつてゐる、と解すべきものでは無からうか。本文の記述が此の句の次から一轉して紫宮の外に出、左右の三星、後の六星、また北斗七星などを説いてゐるところからも、さう見る方が妥當ではあるまいか。此の句の上に脱文があるやうに疑つたものもあるが、漢書の天文志も之と同様であるから、さう疑ふ根據は無い。後にいふやうに、後世になると天一といふ別の星のあることが明に文献にも見えて来るが、同じ時代には太一も北極星でなくなつて来るのであるから、それのみに拘泥することはできなからう。しかし此の中宮の章の結末に「天一、楨、棊、矛、盾、動搖角、大兵起」とあつて、天一は天槍、天楯、矛招搖、盾天鋒と共に北極星とは別の星であるやうにも見えるから、輕卒に斷言しかねる。(序にいふ。天官書の旁三星は *Ursa Minor* の  $\beta$   $\gamma$   $\delta$  等、後句四星は

同じ座の *Orion*、十二星の大部分は *Draco* にあり、また天槍は *Draco's Belt*、天槍は *Antares* の *Orion* であらうか。素戔に引いてある詩緯には「天槍三星、天槍五星、在斗杓左右」とあるが、どうであらうか。紫宮左三星曰天槍、右三星曰天槍、後六星經度掛營室、曰關道、北斗七星……といふ書き方から見ると、天槍、天槍、關道、北斗は紫宮の四方にあるものらしい。關道は *Orion's Belt* であらうし、北斗はいふまでも無く *Draco's Belt* である。なほ淮南子天文訓に「天神之貴者、莫貴於青龍、或曰天一、或曰太陰」とあるが、此の天一は青龍や太陰と同じ様に取扱はれてゐるのを見ると、星の名で無はく、天一地一太一の天一であらう。

(4) 本文に直接の關係は無いが、支那人の考へ方を知るために附言して置く。本來北極星を中宮とし東南西北の四宮と共に五宮を立てる天官書思想は、五行に配當せられる五方の觀念とは一致してゐない。後に作られたらしい文耀鉤が四宮に蒼帝赤帝白帝黑帝を配當しながら中宮に黄帝をあてることの出来ないのも、此の故であつて、本來別の標準に基づいて作られたものを五といふ數があるために強いて結合したから、こんなことが起つたのである。此の無理な結合は既に天官書自身が試みてゐるので、四神のうち三つを東南北の三宮に配當したのがそれである（西方の白虎だけ取られてゐないのは何故であるか明で無い）、四神の色の觀念は五

行思想の四方の色と同じであるのに、一方では五行を代表する五星五帝は南宮のうちにある事になつてゐるでは無いか。これは五遊星と關係のある五行五帝の觀念と天體を五方五宮に配當する思想との不一致を示す物である。文耀鉤が五帝のうち四帝を四宮に配當したのは此の一致しないものを一致させようとしたのであるが、それは天官書思想とは違ふと共に、黄帝のやりばが無くなつて不徹底に終つてゐる。本來は實際目に見える自然現象から抽象せられた觀念でありながら、全く見かたの違ふ幾條かの觀念を頭の中でいろ／＼に結びつけるために、何時の間にか實際の現象から離れてしまつてそれと矛盾する結果を生ずること、また人により時代によつて其の結びつけ方が様々になり、混雜し矛盾してゆくことは、これでも知られる。更に一步進んでいふと、五行の五方は大體自然であるが、北極を天體の中心として其の四方に東南西北を置くといふことは本來不自然な話であるのみならず、常に循環してゐる渾天上の星辰を靜止してゐる如く取扱ふ上に平面的の四方にあてはめるのであるから、益々不自然になるので、それは恰も黃道上の二十八宿を平地に配當する分野の觀念が無理であるのと同様である。

(5) 附書の天文志も大體附書と同じであるが、北極大星太一之座也第一星玄月、太子也、第二星主日、帝王也、第三星主五星、庶子

- 也、所謂第一星者最赤明者也、北極五星最爲尊也」とあつて、太乙の名は無く太一としてあるし、北極大星の名が何となく北極星をさすものらしくも見えるが、天皇大帝の説明は全く晋書と同様であり、太一といふ星もまた別にあるのであるから、大星は五星、太一は太乙、所謂第一星の一は二の誤寫であらうと思ふ。なほ太乙と太一との區別についていふと、早く淮南子天文訓にも太乙の他に太一の名が掲げてゐるが、其れが何を指すかは余には十分領解せられない。けれども星の名で無いことは明である。太一を北極星の外の星の名とすることは、漢代ではまだ無かつたらしい。
- (6) 天一が天官書の陰德に當るものかどうかは明でないやうに思ふ。此の天一も太一も共に *Draco* 中の北斗星に近い方の星らしい。或は *K* と *Q* とであらうか。
- (7) 太微宮はほゞ *Virgo* に當るらしく *Virgins* 即ち *Spica* が重要なる目標とせられたものではあるまいか。それを宮として特に重んじ天皇の居所としたのは、秋分點に於ける黃道に當るからかと考へられる。太微垣と稱せられる一列の星によつて圍まれてゐるといふやうな説は、天皇の居るところとせられた後に附加せられたものであらう。
- (8) 大微と共に南宮に屬してゐる軒轅 (*Leonis* 即ち *Regulus*) の名はやはり黃帝の觀念から來てゐるのでは無からうか。もしさう

- とすれば、この星も黃帝に結せられてゐたに違ない。
- (9) 此の玉京山には須彌山から來た點があるのみならず、枕中記の思想全體が佛教の影響をうけてゐるものであるが、今はそれに論及しない。
- (10) 支那人が佛典を翻譯する場合に屢々天王といふ語を用ゐてゐるがそれは決して政治的君主を指してはゐない。 *Chaturmaharajā* の四天王などには *Devā* の語はあるけれども地上の政治的君主でないことはいふまでも無い。標本的の例としては *Brahmā* の梵天王 *Śakra* の天王などを見るがよい。天王といふ語の意味を支那人が如何に考へてゐたかを考へるには、佛典のいつて來た後の時代のことながら、これも參考するに足りよう。
- (11) 余の有つてゐる漢魏叢書には天皇中女とあるがこれは疑もなく誤である。
- (12) 天皇の宗教的性質については古事記及び日本書紀の新研究第五章を参照せられたい。
- 附記。此の稿の印刷に廻された後、白鳥先生から史記匈奴傳、晋書赫連勃勃傳等に「天王」といふ稱號の出でゐることを教示せられた。今はそれについての考を述べる餘裕が無いが、本文の所説とは必しも矛盾することなしに解釋せられるやうに思ふ。(校正の際に)